

---

# LINGERING SCENT

空知新名

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

L I N G E R I N G    S C E N T

### 【Nコード】

N 8 2 9 1 A

### 【作者名】

空知新名

### 【あらすじ】

忘れようと努力しているのに好き

Hの後、彼がいそいそと背中を向けて下着を身につける姿をベツトに預けて眺める。

男の人のそんな姿を見ると、すごく愛が冷める。

なんか出すもの出して終わらせたって感じというのが伝わってくるし、なんとも情けない姿に見えてくる。

それ以前に彼は私を愛してなんていないけど。

偽愛で虚しさを抱き合ってうめる関係。

もごもごしながら下着を付けると彼がおいでと私の腕を引っ張って近くに引きよす。

『腕枕疲れちゃうよ？いいよ。』

『いいーの。俺がくつつきたいから』

Hする時にしか愛がないはずなのに、彼は優しい人だと思う。

本当の君はどんな人なの？

何を考え、私を見ていながら誰を愛してるの？

私は君が好きなのに。

彼の腕にしがみつくと彼は男の人とは思えないくらい甘い香がした。

彼の車もそうだ。

すごく心地良い。

香水とか車の芳香剤の匂いとかではない。

そういうものの匂いは私自身苦手で具合が悪くなってしまっからだ。

『良い匂いするね』

クスリと笑い猫のように甘えながら私が言った。

『亜美も同じ匂いがするよ。てかシャンプー、パンテーンでしょ?』

身を少し起こして私の顔を覗き込んで目を輝かして聞いてきた。

『うっん、ヴィダル使ってる』

『なんだー。でも亜美も良い匂いするよー。』

お互いにクスクス笑いながら布団の中で抱き合っていたら彼は眠りについてしまった。

こんな関係いつまで続けるんだろう?

彼は私を思ってくれてはいるけど、私を通して誰か他の人を強く思ってる。

こんな事が長く続くと悲しくなくなってきた涙もでなくなっていました。

彼の寝顔をじっと見つめる。

高い鼻、長いまつげ、額、唇。

どれもきれいに整っていて見とれてしまう。

華奢に見えるけど実際肩幅も広いし、手だってこんなに大きい。

けれど私よりも3つも年上なのに、子供っぽくって甘えてくる事が多い。

それを不快とは思わない。

むしろ可愛いと思う。

彼の顔を見ていたら、すぐ目の前の彼が愛しくなって唇にそっと触れてみた。

『んっ…ごめん。寝ちゃった』

彼を起こしてしまった。

『ごめん。きれいな顔だなーと思ってぺたぺた触っちゃった』

『亜美は鼻低いし童顔だもん。まだ中学生に見えるもん。』

そう言うと彼は私にキスをした。

『私そろそろ帰らなきゃ。明日も仕事あるし。』

夢から覚める。

『泊まってけば？朝送るよ。』

それ以上優しくしないで。

『着替えもないし、今日はごめんね』

『今日はっていつも泊まっていけないじゃん』

帰りの車内は無言だった。

彼の優しさが時々ものすごく辛くなる。

普通に付き合って彼の彼女なら嬉しいだろうけど、所詮あたしは本当に愛されていないもの。

私の好きが止まらなくなってしまう。

優しくされて辛い夜は長く一緒に居ないことにする。

私も割り切る事が出来ればいいけど、そんな器用な女じゃない。

男の人は器用だ。

家の前で車が止まった。

『今度はいつ会えるの?』

子犬のような切ない顔で彼が問い掛ける。

この人はこういう事して…確信犯ならかなり質が悪い…

『また予定が解つたら連絡するね』

『…うん』

不安そうな彼の顔を見送った。

ソファに身を沈める。

ぼーっと彼との出会いを振り替える。

『あの、すみません』

『？、何か？』

『リルケ、好きなんですか？』

市立図書館の司書の私は当時リルケを良く読んでいた。

『…ええ』

私は愛想よくにつこりと微笑んだ。

『俺もリルケ好きでよく読むですよ。なんていうか生きてる事  
不安とか心細さが解るっていうか、自分の中の影と光…みたいな』

私と彼はすぐに打ち解けていった。

彼を好きだと思った。

抱かれても嫌じゃないと思った。

けれど彼は愛してるとは言ってくれるけど、私を見てはくれなかつた。

私は彼にとってなんなんだろう。

理由が解るのはそんなに長くはなかった。

彼の部屋の一枚の封筒。



中には9号の指輪と手紙と一枚の写真。

手紙の内容は彼の彼女が亡くなったという事。

唯一の形見の指輪の事。

写真に写る彼女は華奢で可愛い人だった。

見て私は心の中のドロツとした感情が増殖した。

封筒ごと全て捨ててしまった。

彼は私が帰った後気づき、探していた。

ゴミ置場を探しながら泣いていた。

なぜ君は私を観てくれないの？

私はあの人には叶わないの？

『……夢』

いつのまにか眠ってしまった。

嫌な夢……。

彼の心はあの人に縛り付けられてる。

なぜ彼をこんなにも苦しめるの？

わたしなら彼を幸せにできるのに。

あの人さえ居なければ良かったのに。

けどもうこれで終わり。

このままじゃ私も彼もダメになってしまう。

『引き際…なのかな…』

一言ため息混じりにつぶやいて彼に電話を書けた

あれから彼とは会っていません。

毎日仕事に明け暮れています。

今度違う町の図書館に配属されたので、これを期に引っ越しをしようとおもっています。

毎日忙しさに追われています。

けどふとした時、彼の香を思い出します。

そんな時涙かとまらなくなる。

きっと私も彼のように彼に心を締め付けられ続けるでしょう

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8291a/>

---

LINGERING SCENT

2010年10月11日14時48分発行